

会 報

2015年度若手支援企画の記録

「感情研究の現在を読む2」

企画者：藤原 健（大阪経済大学）・木村健太（産業技術総合研究所）・藤村友美（産業技術総合研究所）

話題提供：

木村健太（産総研）・小形佳祐（東北大）

「Four Perspectives on the Psychology of Emotion, Emotion Review」

藤村友美（産総研）・白井真理子（同志社大）

「Gender and Emotion, Emotion Review」

藤原 健（大経大）・大上真礼（東京大）

「Culture, Meaning, and Interaction in Sociology, Emotion Review」

報 告：

本企画では19名が集い（うち6名が話題提供者）、昨年度に引き続き感情研究の現在について議論を行うことができました。企画のご報告をさせていただく当たり、まずは企画者・話題提供者一同より集まっていたいただきました先生方に改めて感謝を申し上げます。以下には、企画者それぞれによる報告と感想を記します。

木村：木村と小形は、感情の心理学的理論をテーマとした特集号“Four perspectives on the Psychology of Emotion”を取り上げました。私たち研究者が感情を研究するときには、基本感情説や社会構成主義に基づく理論といった感情の心理学的理論に基づいて研究を進めます。ここ数十年の感情研究により、それぞれの理論に基づく研究結果は蓄積され、理論は洗練されてきたように思う反面、理論間の関連性について考察される機会は少なく、結局のところ「感情とは何か」という疑問には統一的な答えがないのが現状です。本特集号は、感情の心理学的理論を俯瞰することで、個々の研究領域から離れて今一度「感情とは何か」という問いを考える機会を与えてくれます。本特集号では、進化論的理論、社会構成主義的理論、心理構成主義的理論、評価理論という4つの主要なアプローチを取り上げて理論間の共通点や相違点を考察しています。論文内では、各理論に立脚する著者に対して同一の問いを発することで、理論間の共通点や相違点が明確にされています。このような試みにより、理論間での共通点として、1) 生得的要因と環境的要因の両者の重視、2) 感情は進化的に形成されてきたという観点、3) 感情

の生起における評価的過程の必要性、4) 本質主義の否定、が明らかとなりました。読み手としては、理論間の共通点が明らかになることで、“感情”という概念の輪郭が少しずつ浮かび上がる思いがしました。また、理論間の相違点がはっきりすることで、検証する研究課題が明確化されたと言えます。本特集号を読み進めることで、自分の拠って立つ感情の心理学的理論を他の理論と相対化して捉えることができるとともに、目の前の実験より一段高い「感情とは何か」という問いに対して改めて考える機会になりました。本特集号の紹介が、参加者の皆さんにとっても自分の感情研究を振り返り考える機会になれば幸いです。

藤村：藤村と白井からは、“Gender and Emotion”をテーマとした特集号から4篇を取り上げました。「男性よりも女性の方が、感情表現が豊かで、他者の感情解読も得意である」ことは、感情研究において定説のように思われてきました。今回取り上げた論文では、社会で形成されたジェンダーとしてのステレオタイプ（性特異的規範）の影響も考慮し、従来の理論に一步踏み込んだ最新の知見について触れています。まず、感情表現の豊かさの男女差を論ずる以前に、表情からの感情解読において、顔の相貌的特徴の影響は避けられません。実際、男性の怒り顔のほうが女性のそれよりも強度が強くと知覚されることがあります。例えば、眉が太く顎が四角い男らしい顔つきは、怒りの表出形態と類似しており、コンピュータによるシミュレーションを用いて、各表情の物理的特徴を学習させた場合も、男性の顔は怒りとして認識されます。なぜ、男女の相貌的特徴と表情の形態学的特徴に類似性があるのかは、諸説考えられますが、古来の男性の社会的役割が象徴する「支配性」という信号価値を共有する形で、怒りの表出形態が定まってきたという説もあります。性特異的規範によって顔の「男らしさ」や「女らしさ」がすでに感情的意味を帯びていると考えるのは、表情における感情表出とジェンダーの関係性を論ずるうえで押さえておくべき点だと感じます。さらに、性特異的規範によって、男性は感情表出を抑制しがちですが、強い悲しみにおいては、男女差は小さくなります。とくにスポーツ場面においては、男性が涙を見せていても不自然ではなく、むしろ涙をこらえようと感情制御に努める姿に男らしさが表われることもあります。性特異的規範が文化や社会構造によって形成されることを考えると、感情とジェンダーの関係も時代とともに変化していくかもしれません。感情の表出者と知覚者だけでなく、当事者を

とりまく社会や文化などマクロな視点をもつことの必要性を今回の話題提供で共有できたと思います。

藤原：藤原と大上からは、感情研究に対して社会学的アプローチをとった特集号“Culture, Meaning, and Interaction in Sociology”を基に話題提供させていただきました。本特集号の特徴は、2つにまとめ上げることができるように思います。1つは、デモグラフィックな変数あるいは社会的・経済的・文化的な変数を用いて感情やそれに関わる事象を紐解こうとしている点です。感情について心理学的なアプローチで挑もうとすると、どうしても個人を単位として、個人内の感情経験やその変化に着目するタイミングがくるものです。ある人Xは刺激Aにはaと反応して、刺激Bにはbと反応して…といった具合です。これに対して社会学的なアプローチでは、社会的な場面や役割、個人属性（e.g., ジェンダー）を

単位として感情の理解を深めていきます。もう1つの特徴は、社会問題への対応を重視している点です。例えばジェンダーによってemotional well-beingの変動が説明できるということは、社会的な格差を露わにすることに他なりません（男性の方が女性よりもemotional well-beingが高い等）。こうした問題に光を当て、然るべき提言を模索することも社会学者の使命として述べられていました。以上を振り返ると、普段は心理学的なアプローチのみを採用していた企画者にとって、感情研究における多様な側面や研究アプローチの類似性・独自性を一挙に実感できたように思います。各分野それぞれが得意とするアプローチをとりつつ、時にこれを共有する場を設けることの重要性を改めて感じました。また、本若手企画がそのような動きの契機になればなと思っています。